

特集：患者への図書サービス

愛の移動図書

滝口 シズエ

1. 誕生までの経過

私どもの移動図書は、今は亡き広瀬夫佐子先生（牧野医院々長）が昭和34年、米国政府の招きで渡米され、その時に家庭の主婦たちの病院ボランティアを見学されたことに始まります。このような活動ならきっと日本の主婦たちにもできるのではないかという思いをアメリカみやげに帰国された後、先生ご自身が関西を起点にこつこつとボランティアの受け入れ病院を回られました。

私どもの病院にもお話があり、当時の菊地院長をはじめ長島看護部長、早川副部長、そして後にボランティア受け入れの窓口となる医療社会事業部菊地課長との話し合いによって、昭和39年5月に、当病院もボランティアの受け入れを開始したのです。7月になって初めて、泉尾高校1年生の亀岡秀子さんが、ボランティア1号として小児病棟で子供たちの遊び相手として活動を始め、8月になって、ガールスカウトの方々が加わりました。

しかし、いずれも短期の奉仕でしたし、広瀬先生願望の移動図書を始めるには、なんとしても長期間のボランティアが必要でした。ボランティアが集まればすぐにも発足できるようにと図書運営委員会を設置し、たびたび懇談会をもちました。がそのような時に堺の浜寺小学校PTAのお母さん方36名という多数の参加があり、広瀬先生紹介のバース在日米公使夫人、ステークマイヤー夫人、エリオット夫人、および日赤本社などから図書運営基金として多額のご援助をいただくことになりました。また、病院側からは図書室、本棚、本の

消毒器、事務机、移動車2台、返本を乗せるワゴン車などが提供され、本は1,000冊から始められました。

2. 「愛の移動図書」の誕生

ボランティア受け入れから1年と7カ月という長い歳月を要して、昭和41年10月27日、その名も「愛の移動図書」と命名し、待ちに待った移動図書がスタート、新しい車に新しい本をいっぱい積んで図書室を出発しました。病院側の指示にしたがって、午前10時から12時までは内科病棟4カ所を巡回。できたてはやほやのボランティアだけに、病棟内でもしトラブルでも起こしてはという親心で、しばらくの間看護部長がリーダーとして付き添ってくださることになりました。

重い車を「よっこらしょ」とエレベーターに乗せる。ほっとしたとたん、女3人寄れば何とやら、悲しい主婦の習慣とでも申しましょうか、「わいわいがやがや」院内では特に禁じられている大声でのおしゃべりが始まります。第一歩からこんなことではと、そっと部長の顔を見る。穏やかな静かな笑顔、さすがプロと、頭の下がる思いでした。この方の一挙一動、暗黙の内にご指導くださっている心も知らぬげに、いつやむとも知れない「がやがや」も、エレベーターのストップと同時にストップ。顔が緊張で強張ります。部長の顔を見れば美しい笑顔で、このお顔に右へならえをすることにしました。部長がナースステーションの窓口へ「移動図書です」と声をかける。なかの若いナースが部長に一礼、マイクに向かって「移動図書が参りました。他の患者さんの迷惑にならない

ように静かにお集まりください」。

いよいよ本番、静かに、静かに、上靴の音がやけに気になりました。みんな真剣。部長の相も変わらぬ笑顔によりやく私たちが肩の力をぬき、待ちかねた患者さんたちの「あっ来た、来た」という笑顔に迎えられて、私たちが最高の笑顔で「どうぞゆっくりご覧ください」と患者さんの本選びのお手伝いをします。

指定された待合室での貸し出しが始まり、あれこれと持ち切れないほどの本を手に出係の前に。係のボランティアは、図書ナンバーと患者さんの名前、病室ナンバーを聞いて貸出帳に記入。「また、来週参ります。どうぞお大事に」と、午前中の巡回である内科病棟を終え、いったん車を図書室に入れます。患者さんの昼食中に私どもも職員食堂にて食事。午後からの巡回である外科病棟へ。外科病棟は内科とは少し異なり、手術後間もない患者さんの部屋へは入ることを禁じられていますので、静かにパス。他の病室も定められた部屋のベッドとベッドの間に車を入れ、患者さん一人一人の要望に応じて1冊ずつ手渡します。何冊か「これと、これ」と言われた本を部屋の外にいる貸出係に記入してもらい、また病室に入り、患者さんの枕元に置く。8人部屋なら8回繰り返します。手足の怪我、腹部の方と患者さん一人一人病状が異なっているので、痛むところに本を当てることのないようにと神経を使います。病室は15室程度で回り終わって図書室にもどったボランティ



貸出風景

アたちは、ただ黙々と来週に備えて本の整理をし、後片づけをして、一日の図書活動が終わります。

3. 試練と新たな決意

こんなに大変な移動図書、でも長期入院のために病室から一步も出られず外気に触れることのない患者さん、毎日毎日ベッドの上から見ている白い天井、同じ窓の同じ景色、長い入院ゆえにお見舞いの人も少なくなり、淋しく退屈きまっている患者さんたちに少しでも外気や家庭のあたたかい雰囲気と本とともに運ぶのがこの移動図書です。毎週金曜日には必ず来てくれると喜んで迎えてくれる患者さんのことを思った時、私どもボランティアもこの移動図書を始めてよかったと幸せを感じます。

しかし、こんなに喜んで待っていてくれた図書も、テレビという強敵に押された一時期がありました。考えてみれば、ベッドの上でいながらにして、北は北海道、南は九州、沖縄、地球全部が丸見えで、こんなテレビに勝てるわけはなく、私たちがどうしたものかと思案投げ首。ボランティアの中からも「もう図書の必要はなくなったのでは」というような声も聞かれ、大変なことになったと緊急委員会を開きました。

その席で、佐々木図書部長は「移動図書はどんなことがあっても続けます。今日は図書の日と待っていてくださる患者さんのためにも、また、その



ボランティア会のメンバー

ような患者さんが一人しかいらっしやらなくなっても移動図書をストップすることはできません」と言われましたが、本当にそうなのです。そして、この図書がスタートするまでの多くの方々の苦勞を思うと、その苦勞のおかげでようやく大阪日赤に生まれた移動図書を、少し本の貸し出しが少なくなったからといってやめることはできないという結論に達しました。現在はテレビの影響もなくなり、年に2回新本の購入も行っていきます。冊数も2,000冊を数えました。図書室の開放は週2回、当院の看護学院の学生さんが10名参加し、貸し出しや整理整頓に協力しています。

昭和42年にはボランティアの増加に伴ない、大阪赤十字病院ボランティア会を結成しました。会員数110名で、平成6年には早くも30周年を迎えることになりました。発足当時30～40才代のボランティアも60～70才代の高齢に達し、そろそろ若返りを考えなければならなくなりました。名古屋のきんさん、ぎんさんの言葉ではありませんが、嬉しいような悲しいようなことです。でも悲しいことではありません。大変喜ばしいことです。これから、ますます年を重ねていき、50年、100年と大阪赤十字病院のあるかぎり、病院とともにボランティアも、愛の移動図書も、長く長く生きていきたいと思っております。

4. むすび

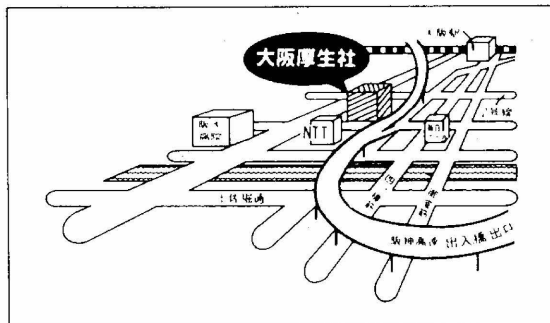
KOSEISHA

Since 1946

■鮮度のいい情報を大量にストック メデイカル情報発信基地!

月刊**医学情報** 医学関連記事を全国21紙より抜粋(年間購読料22,000円)

- TOKYO ☎(03)3294-0021
- YOKOHAMA ☎(045)243-0181
- KANAZAWA ☎(0762)64-0791
- SHIGA-DAI ☎(0775)48-2091
- TOYOAKE ☎(0562)93-1821
- KYOTO ☎(075)761-2181
- MORIGUCHI ☎(06)992-1051
- TAKATSUKI ☎(0726)83-1161
- KINDAI ☎(0723)66-0221
- WAKAYAMA ☎(0734)33-4751



大阪厚生社 本社 〒530 大阪市北区堂島3-2-7 ☎(06)451-3711 Fax.(06)452-5080